

前回の東京五輪 航空支援隊の行動

山根 峯治 陸自70

編集委員長 2020年に東京オリンピックが開かれるが、それにちなんで前回のオリンピック支援、陸自航空支援隊の様相について、投稿いただいたので紹介する。

1 東京オリンピック航空支援隊の編成

第18回オリンピック競技会は、昭和39年（1964年）10月10日～10月24日、東京に於いて開催された。これは日本で行われる予定だった第12回オリンピック競技会が日華事変以降戦争状態となり、実施困難とされて、開催を返上した経緯があった。また、戦後復興の途上にあつたわが国が世界の舞台上に復帰する好機ととらえ、総力を挙げての一大イベントであつた。

自衛隊も多くの選手を出場させ、ウエイトリフティングの三宅選手が金メダル、マラソンの円谷選手が銅メダルを獲得するなど、大活躍した。

また、オリンピックの運営にも多数の隊員が参加した。開会式でプラカードを持ったのは当時の防衛大学校学生

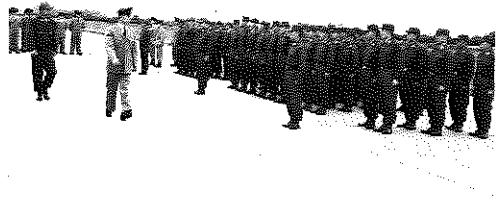
であり、ファンファーレを奏でたのも陸自中央音楽隊だつた。そして開会式の紺碧の空に、見事な五輪をジェット機で画いたのが航空自衛隊のブルーインパルス・チームで、左の写真はJOCのHPから抜粋した。



また、世界で初めてNHKがマラソン全コースをTV実況放送したことや、東京オリンピック記録映画の撮影など、上空からの情報収集・報道などを支えたのが陸自航空科部隊のヘリコプターチームであつた。

自衛隊は東京オリンピック支援集団（団長 梅澤治雄氏）を編成し、隸下に東京オリンピック航空支援隊（隊長 内田精三（佐））を編成した。長澤剛氏

は、支援集団長が訓示で「今一歩の親切心」と言う心構えを説かれたことを、今でも鮮明に記憶していると回想された。

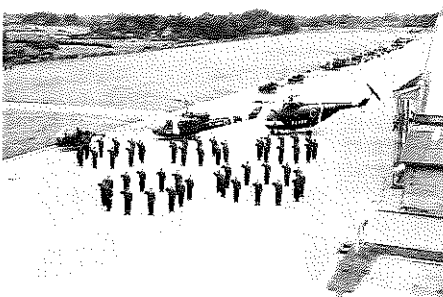
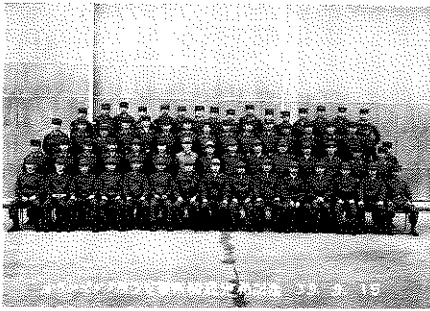


長澤剛、榎原福二郎、山崎辰尾各氏に提供頂いた写真・回想を基に、当時の編成完結（昭和39年9月15日）や米軍横田基地での飛行調整の模様、記録映画（市川崑監督）の撮影、マラソン中継協力等を記録しておく。

東京オリンピック航空支援隊は、9月15日に霞ヶ浦飛行場に於いて編成された。当時の航空支援隊の記念写真は少ないが、提供頂いた一部を紹介する。

上の写真は、編成完結時に霞ヶ浦の格納庫前で全員で撮影したものを、山崎辰尾氏から頂いた。

次の写真は、参加航空機を背景に、全員で五輪マークを人文字で描いたものである。左下は、全員で敬礼をし、次頁の右上は円を描いている。





田基地で調整会議が行われた。

長澤剛氏は、横田との調整に当り、世紀の祭典東京オリンピックの航空支援等が安全かつ整齐と実施できるように尽力された。当時の横田基地は、写真のように米空軍の戦闘機が多数配置されていた。

3 東京オリンピックでの活動

● KH-4、HU-1Bの活動

佐藤正七郎氏の回想（『陸自航空よもやま物語』）によれば、東部方面航空隊からH-13ヘリコプター等を第1ヘリコプター隊長の指揮下に入れ、運用されたと記されている。



2 横田での調整等

都内を飛行して支援する東京オリンピック航空支援隊が安全を確保し、整齐と行動するためには、米軍横田コントロールと緊密な調整が不可欠で、横

導入間もないKH-4も、報道支援や指揮連絡等に活躍した。写真右は、指揮連絡等に活躍したオリンピックマーク入りのKH-4であり、愛機の前に立っているのは、敵本3佐、後方は榎原1尉である。

また導入直後であった、HU-1Bもその速度及びペイロードともに優れ

た多用途性を發揮し、報道カメラマンの撮影協力や映画撮影などで活躍した。中でも、名作として知られる市川崑監督の記録映画「東京オリンピック」の撮影支援をされた山崎辰尾氏の貴重な回想を紹介する。

「昭和39年9月16日（編成完結の翌日）に記録映画の一部である『聖火隊』の撮影支援を命ぜられ、機長 飯野熊雄氏とともに広島県海田市駐屯地に前進した。到着すると直ぐ、当日の撮影担当マネージャーとカメラマン等と一緒に撮影方法について調整（聖火が原爆資料館から聖火台に至る間を撮影する）した。予行なしのぶっつけ本番と



当時の最新鋭HU-1B機

のこと。

翌日、広島空港（現広島西空港）へ移動、カメラマン等が同乗して上空から広島市内の上空視察、現地確認後、広島空港に着陸して同乗者を降ろし、海田市駐屯地へ帰投した。

飛行後、点検の結果、機体に不具合を発見、飛行不能と判断し、ヘリコプター隊本部に連絡した。

翌日、高橋信行飛行隊長以下で部品を緊急空輸して整備を行い、本番当日の支援に間に合わせるといふハプニングもあった。

本番当日は、カメラマン等が同乗して上空待機をし、正午過ぎに聖火隊が予定のコースの走行中を撮影した。そして夕方、広島市内の旅館に移動して市川監督と面談・夕食を共にし、撮影結果について伺い、じ後の指示を受けた。

翌日は、海田市駐屯地から（カメラマン等同乗）松山駐屯地に向かい燃料補給後、宇和島の旧海軍施設跡地に移動し、段々畑の蜜柑林の中を走る聖火隊の予行を何回か撮影して終了した。

夕刻、松山駐屯地に帰投して宿泊する。ヘリコプター隊本部から台風が接近中であるとの情報を得て、急遽防衛基地へ退避し、2日間天候の回復を待った。台風通過後、関西方面での撮影を終了し、いったん朝霞駐屯地へ帰

投した。

数日後、高田駐屯地へ移動し、糸魚川付近にある海岸断崖の『親不知子不知』を通過する聖火隊を撮影し、再び朝霞に帰投した。

聖火隊が都内に入ると、都庁前(現国際フォーラム付近)、日比谷交差点、新宿伊勢丹前を走る聖火隊の撮影を行った。ほぼ終了した日に、迎賓館に招かれ、今までの撮影結果を見せて頂いた。

そして最後の任務は、オリンピック最終日に実施するマラソンコースを、発走前に全て撮影することだった。当時、カメラマンのプロ根性に敬服した思いは今でも忘れがたい」

記録映画「東京オリンピック」を改めて鑑賞し、先輩方の偉業を偲びたい気がする。

● H-19 によるマラソンのTV実況中継

NHKが世界で初めてマラソンのテレビ完全実況中継を行った際、重要な役割を果たしたのが、H-19だった。理由は、飛行時間が長い事と、機体の胴体下部にアンテナを搭載する穴が空いていたことが大きかったと思うと、長澤氏は回想している。このマラソン全中継の様子については、航空学校記事に投稿された「マラソン競技のテレ

ビ中継」(航空支援隊 第1ヘリコプター隊一等陸尉 樫原福二郎)と題する記事に回想されたものを紹介しておく。

「今日は10月21日、マラソン競技の日である。幾度となくリハーサルを実施した結果、準備万端全て整った本番の日を迎えた。少々天候が悪くてもマラソンコースを飛行できるように、不時着場の確認を含めて万全の準備をしてきたが、さすがに不時着の予行はできず、天候についても多少の不安は残っていた。

起床ラッパを待たずに、習慣のように窓を開けて空を見た。そこには恐れていた事態が現われていた。視程障害現象(ヘイズ、スモッグ、ガス等)が午後1時頃からのマラソン中継支援に不吉な前兆のように東京周辺に立ち込めていたのである。早朝から観天望氣を続けておられたらしい隊長が、玄関から入ってこられたが、心なしか深刻な表情をされている。

思えば、昨年10月の国際マラソン、続いて毎日マラソンと中継支援をした時は、いずれも天候に恵まれ、今朝のような不安感も少しも無く、成功裏に終了したのを思い出す。ただ、今日の午後だけは、なんとしても飛行可能な気象条件になって欲しかった。そもそも今回の中継放送は、ヘリコ

プターを宇宙衛星に仕立てて、マラソン競技の生々しい迫力と鮮明な映像を報道するための画期的な試みであり、NHKが全技術陣を動員して、夜を日について研究改善を重ねてきたものである。

日本の放送技術の面目を、世界に紹介し得る千載一遇のチャンスであった。その成果が実現するかどうかは、ヘリコプターの飛行の可否に賭けられていた。いかなる困難も克服して成功させねばならない。それには、ヘリコプターが、是が非でも飛ばなくてはならないのだ。この時ほど天候回復を祈ったことはなかった。昨日も降ったりやんだりの天気で、降り続く雨が、思い切りドシャ降りの雨であつてくれれば諦めも付くものを……と、天に向かつて慟哭した。



右の写真はNHKの技術者と調整するパイロットで、樫原福二郎氏提供である。

朝食の味噌汁やお茶など、水分の多いものは慣例の通り遠慮した。これは連続2時間50分の操縦に、生理的催しを絶無にするためであつた。それだけでなくも任務が終了するまでは、食欲はあまりおきない。幸い衛生支援隊からの心づくしの栄養剤をもらい、それを飲んで活力源とした。

幸か不幸か、朝からの霧は依然として停滞したままで悪くはならないが、良くもならない。天候調査のために飛行してみると水平視程の悪い割に垂直視程は、2000フィート上空からほぼやけて視認できたので、飛行可能な状態と確認し、自信が戻つた。

午後1時、『定刻通り選手は一斉にスタート』の無線連絡を傍受した。移動放送車の標識を見つつ追跡する。操縦席のモニターの映像も鮮明で、ノイズは全然なく上々である。折返し点以降の復路は、『ローマの英雄』エチオピアのアベベ選手の快調な足どりと余裕のある彼の姿ばかりを捉えて飛行する。視程が悪いせいもあるだろうが、余りにも後続集団とかけ離れているため、彼の後に人影を認めず、上空から懸命に探しても円谷選手が走っている姿を見ることがなく、『アア、これが日本の円谷選手だったら操縦の仕甲斐もあるものを』と切齒扼腕。

ヘリコプターの性能を最大限に活用

し、延々2時間50分の完全映像放送の
中継支援は遂に成功した。依然として
靄に包まれ、暮色立ち込めた朝霞ヘリ
ポートに無事着陸した時、隊長以下全
員が整列して出迎えてくれていた。こ
の時、今までの緊張と疲労感はずべて
吹き飛び、代々木のNHKのグラウン
ドでの燃料補給もスタッフの協力以至
短時間に終わり、無事に任務を達成し
た感動が涙とともに込み上げてきた」



注／追記 マラソン中継などの実態は、
NHK特集でも数回放映されており、榎原
氏が録画したビデオも提供され、DVDに
保管してある（OB会で一部は保管してい
ます）

「オリンピック支援 「よもやま話」」

「今一步の親切心」

支援の心構えにあった「今一步の親切心」
について、渡辺清氏は、「行き先を尋ねら
れた際、単に口先だけで、そこは、あの角

を右に廻ったところす…と答えるのでは
なく、今一步突っ込んで相手が容易に理解
できるように、その場所の近くまで誘導す
ること等が、今一步の親切心である」と説
明されている。

これは非常に強く厳しく指導されたこと
であり、今でも心に残っていると回想され
ている。既に述べた長澤剛氏も同様のこと
を回想されている。

「突発事態に心の余裕を」

報道関係のカメラマンを乗せて、江の島
沖で実施されたヨットレースの取材を終了
し、朝霞基地に帰投中のことであった。突
然ローターで空気を叩いたような非常に
強い衝撃を受け、カメラマンがびっくりし
てどうしたんですか？と叫んだ。

余計な心配をさせてはいけないので、内
心ひやひやしなながらも冷静さを保ち、異常
気象のせいですから：心配しないでくださ
い、と言って安心させ、無事に朝霞基地に
帰投した。しかしながら胸中は穏やかでは
なく、常時不時着場を探して異変が起きな
いかと心配しながら何とか朝霞に帰投した
のであった。

着陸後、点検をすると、マストのローター
取り付け部の1本のボルトが弛んで他の部
品との間隙が狭くなり、接触した為だと判
明した。（渡辺清氏回想）